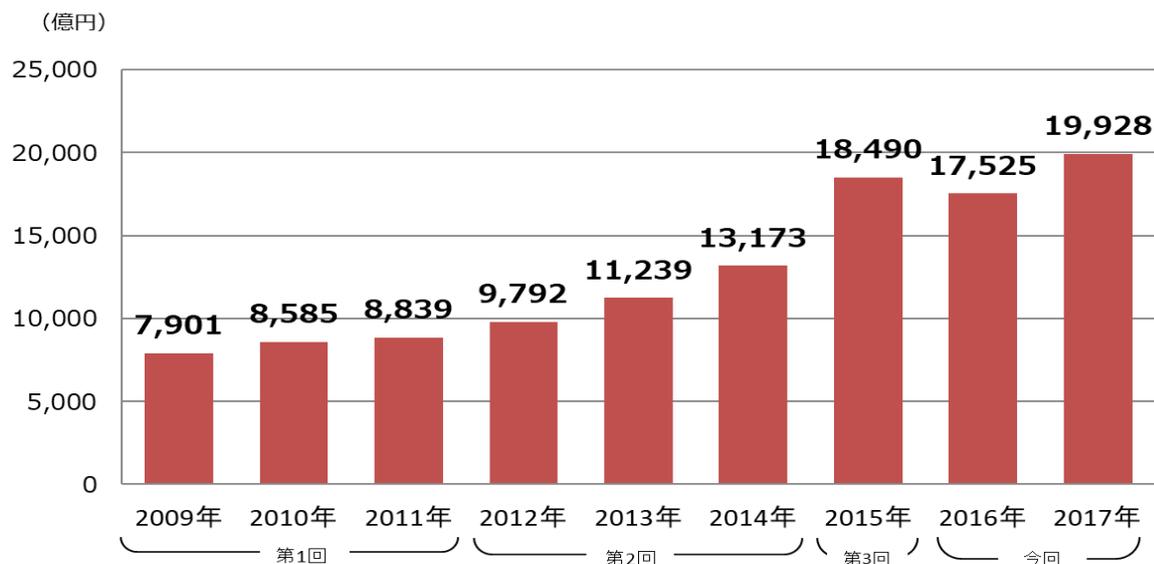


## センサの出荷金額の伸びが示唆するセンシング技術によって 子どもの安全を守るベビーテックの「夜明け」

<センサ世界出荷金額推移（2009年～2017年）>



出所：JEITAセンサ・グローバル状況調査

(出典) <https://www.jeita.or.jp/japanese/stat/sensor/pdf/181211.pdf>

最近では、IoT やビッグデータという言葉を開かない日はない。こういった技術やサービスには、データを収集するためのセンサが欠かせない。まさに、センサは伸び盛りの産業で、業界の統計によれば、2017 年におけるセンサの日本企業による世界向け出荷数量は、285 億 8,541 万 1 千個、出荷金額も 1 兆 9,927 億 51 百万円となり、その前の年と比較して10%を超える増加になっている。日本企業のセンサ出荷は、その数量・金額共に二桁成長となり、300 億個、2 兆円規模に迫っている。おそらく、2018 年、2019 年は、これらの実績を上回る。

保育や育児の分野でも、子どもの安全を守るためにセンサ技術を活用しようという動きは盛んになりつつある。国でも、保育園などにおける子どもの安全確保のために、センサ類を導入する場合の補助金制度をすでに予算化した実績もある。

また、最近では、ベビーテック(baby tech)という言葉に、がぜん注目が集まってきている。「ベビーテック」とは、妊活から出産、新生児から小学校入学ぐらいの年齢の子育てを支援する IoT デバイスやアプリケーション、Web サービスなどを指す総称のこととされている。実は、世界最大級の消費者向けエレクトロニクスの見本市である CES でも、ベビーテックのために大きなブースが設営され、注目を集めている。このベビーテックの多くは、子どもの安全を確保するために、子どもの様子や状況をセンサで検知し、そのデータを保護者に通知、保護者と共有

するという性格のものとなっており、例えば、乳幼児には睡眠時に呼吸を確認するなどの安全面のケアが必要だが、それを頻繁に行うことは保護者にとって大きな負担となる。しかし、乳幼児の特定の異常を通知してくれるセンサは陸続と開発されており、いわばセンサと一緒に子どもや赤ちゃんを見守ることで、保護者の育児負担は軽減されることが期待されている。

これは、保育園等の育児施設においても同様で、現在、待機児童問題から派生した保育士への負担増が叫ばれているが、ベビーテックが普及することによって、保育士の負担を直接的、間接的に軽減する道筋を描き出すことができるものと考えられている。

すでにいくつかの企業が開発しており、例えば、その一社である株式会社 global bridge HOLDINGS(6557)でも、保育園で午睡中の園児が「うつぶせ寝」になっていないか、体温や呼吸に乱れがないかどうか等を検知する「VEVO センサ」を開発し、近々に実サービスを開始しようとしている(<https://c-c-s.jp/function/vevo-sensor/>)。

ベビーテックは、まだ「夜明け」を迎えている段階である。ベビーテックは、決してセンサや IoT 等の技術や機械が育児を人間の代わりに行うというものでない。あくまでも、育児、そして子ども自身の「育ち」の質を向上させ、同時に、保育、育児に携わる者の効率性とレベルアップを手伝うものである。

●当レポートは、信頼できると思われる各種データに基づいて作成されていますが、当社はその正確性、完全性を保証するものではありません。当レポートのご利用に際しては、ご自身の判断にてお願い申し上げます。また、当レポートは執筆者の見解に基づき作成されたものであり、当社の統一した見解を示すものではありません。なお、当レポートに記載された内容は予告なしに変更されることもあります。当レポートは著作物であり、著作権法に基づき保護されています。当レポートの全文又は一部を著作権法の定める範囲を超えて無断で複製、翻訳、翻案、出版、販売、貸与、転載することを禁じます。